

Newsletter 18

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第 18 号 / 2011 年 5 月 13 日発行

Contents

巻頭言	齟齬の快樂
特集Ⅰ	大学教育推進プログラム（通称・教育 GP）「身体知教育を通して行う教養言語力育成」 最終年度へ向けて／セクションⅠ 古典・テキストを想像・創造——精読・分析から創作へ ／セクションⅡ 大学の中と外で展開する新しい学びのスタイルの追求／セクションⅢ からだところどころでつながる人と場所／セクションⅣ 非言語的体験の言語化いかに／セク ションⅤ 微視的作業と巨視的システム
特集Ⅱ	研究から教育へ ～選書～／～教育サポート～／～研究サポート～
特集Ⅲ	研究も教育も レセプションはいかか？／空間より時間／わからないものの魅力を伝える
活動報告	基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」／アカデミック・スキルズ プレゼンテー ション・コンベンション／エディティング・スキルズ／創作発表会
私の〇〇自慢	



齟齬の快樂

教養研究センター副所長
大出 敦（法学部）
Atsushi Ode

いよいよ 2011 年度も始まりました。教養研究センターは本年度もさまざまな企画を展開していきます。センターを拠点とした大学教育推進プログラム「身体知教育を通して行う教養言語力育成」（教育 GP）の実験授業、ワークショップや極東証券寄附講座の授業など目白押しです。そうした意味では、教養研究センターは一種のハブとして学生を含めたさまざまな人的交流を初め多領域が交差する、いわば学問・教育の十字路のような存在となっていると思います。

ところで、実はいささか逆説的なのですが、教養研究センターの授業は齟齬を生み出す場であってもよいのではないかと考えています。というのも最近の学生は議論の場でも「空気を読んで」齟齬を生じさせない高度な技術を張り巡らしているように見えるからです。齟齬は一見、否定的に見えますが、相手の主張に対して、一瞬、立ち止まり、批判的な疑問を投げかける契機となる点で、批評と結びつくと思います。一定方向に、しかも見かけ上、きわめて円滑かつ調和的に進んでいってしまうことが多い議論に齟齬を生じさせることで、批評を成立させるのです。

齟齬を生じさせないことで批評を回避している学生に対して、教養研究センターの提供している授業は、この見かけ上の調和の躓きの石となれどと確信しています。例えば人文科学、社会科学、自然科学の学生がともに学ぶアカデミック・スキルズは、異なった意見が交錯する齟齬の場です。本年度は、従来のも

のに加え、英語による論文作成を目指すコースや文献批評、創作と批評、実地調査の 3 コースが拡充・創設されています。こうした授業は単に論文作成の技法を超えて、学生相互の批評の場として機能することになるでしょう。また昨年度より正規授業化した「身体知」の授業は、身体を使うことで新たな文学解釈を得るという、これまでの机上の文学解釈とは異なった経験ができるものです。本年度は身体を使った詩の解釈がテーマとなっています。さらに「生命の教養学」は、文系の知と理系の知の融合を目指すもので、本年度は『『共生』をめぐる理系と文系の対話』というテーマで文系と理系の異なった視点から論を展開することになるでしょう。

一方で私は、齟齬は大きな対立項を設定する論争ではなく、差異を生み出すものであるべきだとも思います。齟齬が差異を絶えず生み出し、ひとつのものに固定し定義されることを先送りしていくことをかつてロラン・バルトがテキストの快樂と呼んだのにならって、これを齟齬の快樂といってもいいのではないかと思います。そうした意味で教養研究センターは本年度、どのような齟齬の快樂を味あわせてくれるのか、楽しみです。



エディティング・スキルズのメンバーと一緒に

『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』（Les Très Riches Heures du duc de Berry）として知られる 15 世紀フランスの写本「4月の暦」より。「冬の外套を脱ぎ捨て、美しく輝く太陽の縫い取りをまとう時」と中世の詩人が詠った 4 月。見つめあう前面左の男女はベリー公の孫娘とシャルル・ドルレアンとの言い伝えもある、春の光景。

大学教育推進プログラム（通称・教育 GP）「身体知教育を通して行う教養言語力育成」 最終年度へ向けて

2009年に始まった体験型授業を言語力育成に繋げる教育 GP「身体知教育を通して行う教養言語力育成」はこの春に最終年度を迎えます。ここでなすべきことは、参加教員の自主性を尊重しつつも、とりわけ「身体知教育を言語力育成に接続する」という本プログラムの骨子からぶれないように注意して、3年間の成果を深め、磨き上げ、まとめ上げてゆくことです。それが、優れた最終報告と良い外部評価に繋がれ、ひいては本教育プログラムの教育システムとしての有用性を広く社会に発信することに帰結するでしょう。

5つあるセクションの内、「アート」では、言語芸術である文学関連の身体知教育が増加し、充実します。「フィールド・アクティビティ」セクションでは、日吉キャンパス周辺から岐阜県高山市に至るまで、種々の場所でフィールドワークが実施されます。「コミュニティ」セクションでは、横浜市にある大学拠点「カドベヤ」での関連事業が充実します。「コミュニケーション」では、怒りや対人葛藤の問題に焦点を当てます。「発信・評価・システムデザイン」のセクションでは、発信の手段となる編集スキルの授業とともに、本取組全体の成果発信や全体のシステム構築のための作業を進めます。

（武藤浩史）

セクションI アートと文学

古典・テキストを想像・創造する——精読・分析から創作へ

最終年を迎え、年間を通して授業とワークショップ（WS）を組み合わせ身体と言語の相互還元と統合を目指します。キャッチ / ボディ・コピーを製作する身体知への言語学的な接近や自己の瞑想体験を言語化して他人に伝える文学体験、また音楽の授業内でも様々な試みがなされています。5月にはフラの歴史・文化・フラの言語と運動をつなげるWSや現代文学における朗読と身体役割を探る企画が目白押しです。読書体験を創作へと連結させる精読と創作の循環を古典において展開する作業もすすめられています。今秋には川村旭芳さんによる「筑前琵琶で聴く『平家物語』」で、感動的な演奏と語りを体験し古典をよみがえらせます。

古典のもつ圧倒的な力を借りながら、テキストを真に身体化すること。言葉という音楽、体を動かすことで広がる想像力、テキストに声と身体で向き合うことで見える発見を共有し、ことばに命を吹き込むことで言語と身体を結びつけることができるのです。「シェイクスピアを遊ぶ!」シリーズや「アーサー王伝説：ストーリー分析から創作へ」は共に、古典の精読を身体フィルターの通す教育を核として、高度のリテラシーを磨くとともに、他者へ伝え理解してもらうための表現として、言語による創作を実践する授業モデルの提示を目指します。

（不破有理）

セクションII フィールド・アクティビティ

大学の中と外で展開する新しい学びのスタイルの追求

セクションIIでは、2009年度から2010年度にかけて、既存の授業を充実させる方向性で数々の新しい取り組みを行ってきました。まず、調査の技法を身に付けるための機会として、「社会学」の授業で、実習を多く取り入れた授業を展開しました。また、少人数セミナー形式の授業で、聞き取り調査を行う前の準備として教室内での実習を行いました。

一方、大学の外で展開した活動としては、大学ですでに設置されている少人数セミナー形式の授業で、日吉近辺で地域活性化に関する取組を行っている人々を取り上げて、その活動内容について調査を行いました。また、大学を遠く離れた地方都市で展開する地域振興に関する取組についての取材を行うセミナーもありました。さらに、地域を活性化させるための方策として、最新の情報機器を利用する方法を考案し、その効果について実証実験を行う授業もありました。

2011年度の活動予定としては、まず、2010年度までの活動を継続することで、学生諸君が実際の調査を行う機会を提供することを行います。それに加えて、「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」を新規に開講し、より多くの学生と調査技術の習得を目指します。

（長田 進）

セクションⅢ コミュニティ

からだところつながる人と場所

キャンパスの中をつなげるだけでなく、外ともつながろう。積極的に大学の外を教育の場として活用していこう。この趣旨のもとに教養研究センターは港区に「三田の家」、横浜に「カドベヤ」という2つの町中キャンパスを運営しています。「三田の家」は2011年で設立5年目を迎え、去年の11月には今までの活動をライブ感豊かにまとめた本、『黑板とワイン——もう一つの学び場「三田の家」』が慶應義塾大学出版会より発刊されました。横浜の拠点「カドベヤ」は2010年4月に開所して2年目を迎えました。今年の3月11日に起きた大震災では「三田の家」の妹「芝の家」と「カドベヤ」が地域の人をつなぐ重要な役割を果たしました。そんなカドベヤの設立2年目を振り返るために、3月25日にホームレス支援雑誌『ビッグ・イシュー』の支援を受けるダンスグループ「新人Hソケリッサ!」の皆さんを迎えて日吉でシンポジウムが開かれました。シンポジウムに先立ちソケリッサとカドベヤから生まれた「カドベヤーズ」それぞれのダンスが披露され、まさに身体と言葉を通した交流の場となりました。「カドベヤーズ」は5月11日のHAPPY公演「ダンス・ライブ『先ず獣身を成して後に人心を養う』」でもそのエネルギーを惜しみなく発揮し、会場に来ている学生と観客総出で、最後は大ダンス大会となりました。2つの拠点がつなぐ人と場所はこれからもますます増えていくことでしょう。(横山千晶)

セクションⅣ コミュニケーション

非言語的体験の言語化 いかに

2010年度は、「身体知集中実験授業：心をひらく体をひらく“初心者のための瞑想入門”」を文学部の榎尾直樹先生にご協力いただき実施しました。瞑想という非言語的精神作業のいろはを体験することによって、身体知教育の1つの究極を模索しました。また、その体験をあえて「ふりかえり」や「シェアリング」などで言語化することによって、非言語的体験の言語化という、人文的知の1つの原点／限界に挑むつもりでした。が、今回はその目的を十分果たせなかったため、2011年度春学期は「文学I：言葉と瞑想的体験」において、それに再挑戦するつもりです。

また、秋学期の「文学II：日々。生きる現代文学」では、詩人上田假奈代さんとコラボレーションします。彼女は、今、大阪の釜ヶ崎で、「こえとことばとこころの部屋：cocoroom」を拠点として、独自の詩的アクティビズムを展開しています。そんな彼女に導かれながら／煽られながら、日々の生の一断面を、鋭利に官能的に、言葉へと、表現していくとともに、その表現を他者と分かちあうことにより、「通常の」コミュニケーションを超えた交感の悦び・危うさを体験してもらおうと思っています。(熊倉敬聡)

セクションⅤ 発信・評価・システムデザイン

微視的作業と巨視的システム

セクションⅤは、大きく分けると2つの領域に分けられます。1つは学生に編集のスキルを身につけさせることに主眼をおいたエディティング・スキルズ、もう1つは各セクションの成果を取りまとめ、発表し、さらにはそれを評価し、新たなモデルを提示する発信・評価の部門です。

昨年度は、エディティング・スキルズは実験授業の形態を取り、学生は木曜日5限終了後に集まり、編集のノウハウを慶應義塾大学出版会の協力を仰ぎながら習得しました。今年度も昨年同様、手づくり本、同人誌・法学部フランス語インテンシヴコースのニューズレターの編集、生協での書籍フェアの開催などを計画しています。われわれが目指しているのは、学生が掲載すべき記事に対し一種の批評を行い、さらにはそれを相手に理解できるように表現して編集をすることで、批判的で説得力のある言語力を身につけることです。一方で、今年度は各セクションの実験授業、ワークショップの成果を外に向けて発信するための論集、文学集、詩集などの編集を各セクションと連携しながら学生を中心に行う予定です。

また本年度は教育GP最終年にあたりますので、全体の評価と新たな教育モデルの構築をしなければなりません。そのためのアンケートの作成、集計、分析などを行い、汎用的なシステムのデザインを検討することになるでしょう。

(大出 敦)

～選書～

選書をよろしく!

2003 年に第 1 号が刊行された「教養研究センター選書」、2010 年度は数点の応募があり、3 月に以下の 3 点がラインアップに加わりました。

教養研究センター所員の学術研究を一般読者に向け、より開かれたかたちで紹介する選書シリーズ、所員のみなさんにとっても研究・教育交流の活力となること請け合いです。

選書は今年度も刊行を予定しております。今年度の事前申込締切は 7 月 29 日（金）、原稿の締切は 9 月 30 日（金）です。

（吉田恭子）

教養研究センター選書 8

『身近なレトリックの世界を探る——ことばからこころへ』

本書は、レトリックについての入門書で、CM やキャッチコピーから選んだ身近な例によって、親しみやすさを工夫しました。テレビの CM やキャッチコピーは、視聴者を説得するために弁論的なレトリックを駆使すると思われがちですが、むしろ修辭的な面白さを狙ったレトリックが多く、そうした日本人の好むレトリックやその効果についても解説します。さらにレトリックが人間の感情に及ぼす効力にも触れ、レトリック技法に新たな分類（リズム、発見、おかしみ）を提案しました。ふだん何気なく見たり聞いたり使ったりしているレトリックの大切さを再認識し、ぜひその面白さを味わって欲しいと思います。

（金田一真澄）

教養研究センター選書 9

『触れ、語れ——浮世絵をめぐる知的冒険』

「浮世絵ってどうやってみるんだ? 会議」と名付けて行なった活動から生まれた本。さまざまな分野の教員が手を携えた学内でのワークショップや日吉の HAPPY での展示をもとに、紙上のワークショップを展開しています。本書の目論見は、浮世絵を通じて学ぶこと。知識のインプットと思考のアウトプットです。

本は一枚の浮世絵を題材に、江戸時代に近づき、自分の目が何をとらえているかを考え、その思いを誰かに伝える、という順番で進みます。語る相手は視界を共有していない誰か。視覚障害者と目を閉じて浮世絵を鑑賞して、コミュニケーションの根本を考えました。あなたのイメージをする力はどれくらいですか? 何かの気づきが生まれる事を祈っています。（津田真弓）

教養研究センター選書 10

『牧神の午後——マラルメを読もう』

マラルメの名は知られています。しかし読まれているか、と問えば、答えは絶望的でしょう。本書はその代表作『牧神の午後』を読もう、という誘いです。目的の第一は、「詩を読む」こと、その実践の手つきを提示することでした。従って、テキストの字義を明らかにする、という愚直な作業が基本になります。わずか一篇の詩に小部とはいえ一冊の書物を費やすというのは大袈裟かもしれない。文学的素養など顧みない時勢に抗う、無謀な企てでしょう。しかしそれでも、本書の試みが、言葉がいま抱える困難を共に乗り越えようという呼びかけとなり、また乗り越えた後に広がる光景を淡くとも映すことができたなら、これ以上幸せなことはありません。（原 大地）



注目！ 助成制度・「円卓」の会始まる

研究関連の新企画の情報を2つお知らせいたします。まずは、学会・ワークショップなどの開催支援制度試行についての「耳より情報」です。教養研究センターの所員が企画する研究会やワークショップを応援し、広く所員の方々が参加できるような研究・交流の場を広げたいという趣旨で、開催に伴う経費（謝金、印刷費など1件上限10万円）の助成や日吉キャンパス内の広報を支援いたします。応募条件は開催が秋学期で、場所が日吉キャンパス内であること、助成を受けた企画の成果は一般に公開するなど報告が必要です。申請書の締め切りは5月下旬、応募多数の場合は調整のうえ、選考結果を6月末にはお知らせします。詳細は教養研究センター事務室にお尋ねください。

次に「研究の現場から」シリーズ第1弾のお知らせ。円卓のように上座も下座もなく、自由闊達に研究を語り合い、議論するような時間と空間を創りたいとの願いから創設された企画です。講師をお招きして…とはいえ、講師になっていただくのは同僚。存外、同僚に研究を語っていただく機会がありません。今回はコロンビア大学からご帰国したばかりの大和田俊之さん（法・英語）と日吉に4月から着任なさったばかりの片山杜秀さん（法・歴史）を講師にお招きします。大和田さんは米文学がご専門ですが、ポピュラー音楽（留学中はアンダーグラウンドなヒップホップ!）もご研究中。大和田さんからはコロンビア大学で何と90年以上も続く驚愕のコア・カリキュラム、究極の教養カリキュラムについてお話いただける予定です。片山杜秀さんのご専攻は政治思想史ですが、音楽評論家（『音盤考現学』『音盤博物誌』で吉田秀和賞・サントリー学芸賞受賞）の横顔もあり、かつまた戦前の右翼思想の研究家（『近代日本の右翼思想』（講談社選書メチエ））でもあり、サブカルチャーにも通じていらっしゃるそうです。素敵なお二人のお話を一度に聞けて、語り合える貴重な機会です。ドリンク・スナック付きのサロン・ド・日吉。奮ってご参加ください。

（不破有理）

助成申請書 見本

教養研究センター所長 殿		平成 年 月 日	
申請者所属 申請代表者名 連絡先E-mail:			
学会・ワークショップ等開催支援申請書			
会 合 名			
主 催 者	塾（内・外） （□ で囲む）	個 人 名 （または団体名）	
申請プログラムの内容 （具体的に記入してください）			
申請理由・申請プログラムの企画意図			
開 催 日 時	平成 年 月 日 ～ 月 日	開 催 場 所	
参加予定人数	名〔塾内 塾外 名 名〕	公 開 方 法	
予 算	援助申請額 _____ 円（最大10万円） （内訳明細）		
期待する成果と今後の展開（教養研究センターの活動の機軸との関連）			

※関係する資料等を添付してください。

研究の現場から

講師：大和田俊之「コロンビア大学の教養教育」

片山杜秀「沖縄反戦デーから石油ショックまで

——私の原体験と現在」

5月26日（木）18:15～20:30 来往舎 1F 101・102

日本ケルト学会主催講演会「アイルランドの神 Lugh（ルーク）について」（使用言語：フランス語・通訳付）

講師：フィリップ・ヴァルテル（グルノーブル大学）

9月10日（土）14:30～ 来往舎 2F 中会議室

問い合わせ先：文学部 辺見葉子 hemmi@flet.keio.ac.jp

求ム・来往最前線情報！

教養研究センターでは日吉の研究環境活性化を大きな目標のひとつに掲げています。ニュースレターでも積極的に研究関連の広報をしていきますので、どんな小さな集まりでも、日吉での勉強会、シンポジウム、ワークショップ等の情報をぜひお寄せください。次号では12月以降2012年5月までの研究関連イベントを広報いたします。教養研究センター（toiawase-lib@adst.keio.ac.jp）まで、①日時、②場所、③研究会名、④講師・タイトル名等、⑤担当教員名、をお知らせください。（吉田恭子）

研究から教育へ～教育サポート～

学生同士の学びの場を築く——学習相談アワー

大学に入ったばかりの多くの学生にとって、レポート作成は1つの関門です。全く書いた経験がなく、レポートというもののイメージをまるでつかめない人もいれば、書いたことはあるが、要求されていたのは書籍やインターネットから関連記事を抜き出しまとめるところまでだったという人もいます。そういう学生に一からレポートの基本を教えることに、困難を感じている先生も多いのではないのでしょうか。メディアセンター内で開かれている「学習相談アワー」は、大学での学習に必要なスキルを学生自身で教え合い学び合う仕組みを作る試みです。これを学生に紹介くださることによって、先生方はより専門性の高い事柄の教授に専念することができます。

(種村和史)

図書館員の「教員」サポート——メディアセンターから

図書館員は、教員とは異なる場所で学生に接しています。ここでは、一般的・普遍的な資料の探し方を教えています。研究者から見ると、回り道していることも多いかと思いますが、他の分野にも適用できる方法です。また、参考文献（特に雑誌記事）が探せないといった学生の躓きを数多く目にしています。

日吉メディアセンターでは、教員からの依頼で行う「情報リテラシーセミナー」で、あるいは教養研究センターと日吉メディアセンター共催の「メディアリテラシー・ワークショップ」で、これらを教員にも説明・フィードバックしています。また、オンラインの自習教材 KITIE や PATH にその内容を盛り込んでいます。

教員の皆様には、メディアセンターのサービスを活用いただければと思います。

(和田幸一)

日吉行事企画委員会（HAPP）春学期の活動

企画名	日時・会場
日吉能	日時：4月27日（水） 会場：来往舎イベントテラス
塾長と日吉の森を歩こう	延期
黒沢美香および黒沢美香＆ダンスーズ公演	日時：5月11日（水）18時 会場：来往舎イベントテラス
環境週間 2011	日時：6月13日（日）～18日（土） 会場：日吉キャンパス
室内アンサンブル・フェスタ	日時：6月中旬ごろから7月初めの2週間 会場：来往舎シンポジウムスペース および藤原洋記念ホール

*学事日程の変更により、日時が変更になる場合がございます。

ひとりで抱えこまないで！——学生相談室から

教員の方々は毎日いろいろな学生と接していらっしゃると思いますが、そんな中に意欲が全く見られない、不安そう、授業が休みがちになっている、など気になる学生がいませんか？

また学生に相談されたが、どう対応したらよいか分からず困っているようなことはないでしょうか？

学生相談室の目的は、学生の健全な発達および学生生活の向上を支援することです。学生本人の相談はもちろんですが、学生に関することで必要と認められれば、教員の方々のコンサルテーションも受け付けております。

ひとりで抱えこまず、どうぞ相談室を気軽にご利用ください。連携・協働することで学生にとってよりよい支援の方法が見つかるかも知れません。

学生相談室は4号棟独立館にあります。

(佐藤曉美)

レセプションはいかが？

ヨーロッパの図書館・文書館には中世のキリスト教の説教写本が膨大な数で残っています。それらを著し、筆写し、手本として口頭での説教に用いた人々の活動の規模は、活版印刷以前のマス・メディアと呼べるほどでした。私の研究は、このような説教活動にかかわった中世ヨーロッパの人々の知的世界の復元を目指すものです。

日吉における研究交流についてということで、以前伺った話を思い出しました。私の着任は現在の来往舎の完成後なのですが、以前の日吉研究棟では受付の方が談話室で1杯50円のコーヒーをだしておられ、帰りがけにそこで談話をするのが教員間の良い交流の機会になっていたそうですね。建物は新しくなったが、そうしたことが失われたのは残念だとも伺いました。

同じことは今では難しいかもしれませんが、たとえば教養研究センター主催イベントの前にレセプションを行うのはいかがでしょうか。留学先のイギリスの大学では、この種の集まりの開始前の半時間ほど、会場で紅茶や菓子、ときにはワインを出していました。1人1ポンド程度を箱に入れる場合もありました。レセプションといってもワインや紅茶を片手に立ち話をするだけで、懇親会というほど大げさなものではありません。ですが、それが意外な出会いを生み研究上の刺激をもたらすこともあると経験しました。

これは一案にすぎませんが、意外にこうした些細なことが交流をうながす環境づくりに役立つのではないかと思います。

(赤江雄一)

研究も教育も

空間より時間

学者というのは単独行動者です。おそらく最初の学者は聖職者で、殆どの作業は修道院やお寺で一人で読んで考えてまた読むという静かな作業の繰り返しでした。あたり前のことですが文学（Literature）という分野はそもそも文字に書かれたことの研究です。何と言っても本より情報密度が高く、沢山の意味が詰め込まれたものではありません。

現代の大学講師はどうでしょうか。文科系、とりわけ文学の研究に話を限定すると理想的な状況はおそらく次の様でしょう。多くの時間を一人でする活動、すなわち読書で過ごします。その研究に基づいた新しい論説や解説を築き上げたうえで、教室で一番熱心な学生に語ることによってさらに分析を磨きます。その後学会などで発表して、ようやく本を書くことによってさらに教育的な目的を果たすわけです。

語学の先生はその状況からはほど遠いでしょう。初習言語を教えている文学専門の講師はまず自分の専攻と教えている授業の格差に立ち向かわなければなりません。教員としての2つの義務、つまり教えることと研究することははっきり分かれていますので、教育に関しては知識より方法論の問題になります。

私のように文学を専門にしている英語の教員は、また違う状況におかれています。英語なら毎年慶應に入学する塾生はかなり高いレベルまで勉強してきています。そのうち5%程度はネイティブ並みです。私が担当している授業の多くは超上級レベルなので、準備の時間がかなり長くなります。しかも、文学を専攻していない学生に無理矢理文学を勉強させるのは好ましくないのも、歴史、心理学、社会学、哲学などのテーマも取り扱わなければなりません。それも教養学として英語を教えている者としての義務ですので、不満を言う余地はありません。しかし、このために研究をする時間が限られていることは確かです。

授業と研究の内容がこれほど不一致な教員の場合、どうすれば2つを両立できるのでしょうか。勿論、同僚と語り合う空間が役に立ちます。しかし、それはどちらかというと教育的な問題に関してがほとんどです。ちなみに来往舎が建てられるとともに、大学には不可欠と思われる専任教員の談話室がなくなりました。同じキャンパスに専攻が似ている先生は多少いますが、研究についての話し相手ならキャンパス外の方が大勢います。

どんな組織にとっても自由に考える時間を構成員に与えることが一番承諾しづらいものです。大学という機関以外ではまず考えられないでしょう。大学でさえ、仕事に関する定期的な報告書などを要求しがちで考える時間をさらに減らします。

文科系の講師にとっては、大事なものは空間より時間になります。ハムレットが言ったように——「なにを言う！ このハムレット、たとえ胡桃の殻のなかに閉じこめられていようと、無限の天地を領する王者のつもりになれる男だ。悪い夢さえ見なければな！」“O God, I could be bounded in a nutshell, and count myself a king of infinite space—were it not that I have bad dreams.”（「ハムレット」第5幕第2場）
（レイサイド・ジェームズ）

わからないものの魅力を伝える

私はキューバの文化・社会を研究しています。そのため、スペイン語の授業のほかに「ラテンアメリカ研究」というオムニバス授業のコーディネーターも担当しています。近年、第2外国語としてスペイン語を履修する学生が増えています。それとともにスペイン語圏への関心も高まっているかという、残念ながら必ずしもそうとは言いきれません。「スペイン語」という名称からスペインという国を思い浮かべることが容易でも、スペイン語を話す国の多いラテンアメリカをすぐに連想する人はまだ少ないのが現状です。また、古くから日本と交流のあった他のアジア諸国や、日本の近代化の手本となってきた欧米とは異なり、日本からは地理的にも遠く、まだまだ発展途上のイメージの強いラテンアメリカからは何を学べばいいのかわからないという学生は多いようです。その点では、ラテンアメリカに関する研究成果を教育の場に還元するための努力が、私たち研究者にまだ不足しているといえるでしょう。何のためにラテンアメリカを学ぶのかという学生の問いに真摯に答えていくことは大きな課題です。しかしその一方で、学ぶこと、研究することには、あらかじめその理由や目的が明確にあるわけではありません。何の役に立つのかという問いを宙吊りにしたまま、わからないもの、未知なるものについて思考するという知的な冒険の魅力をいかに伝えるかが大学教育では求められていると思います。アカデミックな型にまだ取りきれていないラテンアメリカは、その魅力を伝えるのに恰好の地域です。この地域をわかりやすく読み解いてみせることよりも、わからないものを面白いと思う好奇心を学生から引き出すような講義を実現したいというのが、教員としての私の目標です。そして、そのためには私自身が研究者として未知なるものにときめく気持ちを持ち続けることが大切なのだと思います。
（工藤多香子）

基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」

教養研究センターの基盤研究は、2003 年より継続され、カリキュラムに関するさまざまな提言を行っています。

2010 - 11 年度のプロジェクトでは、カリキュラムに関する教員アンケート調査を実施しています。対象は、慶應義塾大学で直接的・間接的に教養教育に関わる専任教員 670 名です。アンケートでは、大学における教育内容や目的、シラバス、成績評価、授業運営、授業評価、セメスター制の問題などに関して、教員の皆さんがどのように考えているかについて、多角的に調査しています。

基盤研究では、カリキュラムに関する学生対象のアンケートを 2005 年度に実施しています。それと今回の調査を対照することによって、学生・教員双方の意識の違いや共通性を知り、今後のあるべき大学教育の姿を浮かび上がらせていきたいと考えています。

アンケートの結果は、2011 年春学期までに集計・分析をします。7 月にはシンポジウムを企画しています。そこで、調査結果の公表をするとともに、それに基づいて大学教育の課題と行うべき取り組みについて、皆さんと考える機会としたいと考えています。

(佐藤 望)

アカデミック・スキルズ プレゼンテーション・コンペティション

2011 年 2 月 7 日 15:00 より来往舎シンポジウムスペースにおいて、極東証券寄附講座アカデミック・スキルズ、プレゼンテーション・コンペティションが開催されました。極東証券株式会社代表取締役社長 菊池廣之様を始め、多くのご来賓の方、塾生の見守る中、6 人のクラス代表が研究発表を行いました。メディア・リテラシー（応用編）クラスによる活動報告（受講生による 2 つの映像作品の上映）を挟んで、審査結果が発表され、プレゼンテーション部門として、金賞 2 名、銀賞 2 名、銅賞 1 名、奨励賞 1 名が表彰されました。また、授与式では、事前に行なわれた論文部門の審査結果の発表もあり、金賞 2 名、銀賞 2 名、銅賞 1 名、佳作 1 名が表彰されました。最後に、菊池社長からお言葉をいただき、コンペティションは、盛況のうちに閉幕しました。（篠原俊吾）



エディティング・スキルズ

「ほんとに本を好きになるために」と銘打って 5 月に説明会を開催、予想以上に熱心な学生たちが集まり、以後、ほぼ週 1 回のペースで実験授業を続けました。本づくりは今や DTP が常識なので、コンピュータ上の組版はもちろん必修。しかし本という古いメディアの可能性を知る出発点として「原始的な」本の手触りも体験してほしい。そこで DTP の授業と並行して製本教室を開き、1 人 1 冊の「手づくり本」の制作をおこないました。もうひとつ考えたのは、本づくりの過程の最後まで、つまり本を読者の手に届けるところまで、ちゃんと意識を向けること。1 月に日吉生協でブックフェア「恋愛×○○（レナイカケル）」を開催したのはそのためです。

2010 年度の活動の集大成、キャンパス雑誌『ばら☆ばら』（仮題）と学生たちのサイト editingskills.net をぜひご覧ください。

(笠井裕之)

創作発表会

「Alfred Tennyson, "The Lady of Shalott" の創造的解題」のシリーズの締めくくりとして、学生による創作発表会を 2011 年 1 月 7 日に開催しました。1 年かけて学んだアーサー王伝説は、テニソンの「シャロットの女」と夏目漱石の『薔露行』の精読と議論を通して創作に結実しました。創作者となるためには真にテキストを内在化しなければならず、学生は創作者の立場にたって改めて「テキストを読む」行為の意味を考えたようです。発表会当日、学生がみせた充実した表情は印象的でした。お正月返上で書き上げた労作・秀作は小関章ラファエル氏の協力の下、文庫構成に編集され「アーサー王研究会創作文庫」第一号として Web 公開されています。（小説『聯璧の詩』・『「シャロットの女」殺人事件』・紙芝居『シャロットの女～鏡の向こうに観たものは～』）
<http://arthuriana.info/2010/ASCRaCWinfo.html>

(不破有理)



私の^{マルマル}名字自慢

お世話になっております。

本ニュースレターの制作を担当させていただいております慶應義塾大学出版会の乙子と申します。

さて、自慢というより、自己紹介の度に相手を戸惑わしてしまう私の名字ですが、実は歴とした日本語の熟語のようです。

広辞苑（第六版）には、「おとご【弟子・乙子】」とあり、意味としては「末に生まれた子。末子。」とのこと。

派生語としては、「乙子月」「乙子の祝い」「乙子の餅」があるということですが、残念ながら日常会話の中では一度も聞いたことがありません。

そんな知名度が全くなく、名乗るとたいへいの場合、「後藤さん」と間違えられてしまう面倒な名字ではありますが、逆に一度覚えていただいたら、なかなか忘れられない名字だとも思いますので、みなさま今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。（乙子 智）



Newsletter
2011. May No.18

慶應義塾大学教養研究センター (Keio Research Center for Liberal Arts)

発行日: 2011 年 5 月 13 日 代表: 不破有理

〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1 TEL: 045-566-1151 Email: lib-arts@adst.keio.ac.jp
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>